

〔資料・講演録〕

沖縄国際大学・沖縄法政研究所

## 第14回講演会

日時 2007（平19）年8月18日（土）

午後3時～4時半

場所 沖縄国際大学5号館107教室

## 政治をめぐる言葉

講師 秋 山 和 宏

（日本大学教授）

### 〔講演要旨〕

政治の歴史は人類の歴史と共に古い。こうした長い年月の間に数多くの政治をめぐる言葉が生み出された。それらの中には政治を学ぶわれわれに有意義なものも少なくない。ここで言う「政治をめぐる言葉」というのは、（1）政治そのものを説明する言葉、（2）政治のあり方を示す言葉、（3）政治の姿を捉えた言葉 などの意味である。まずは言葉に依拠しつつ政治とは何かを検討していく。政治そのものが広大で複雑な現象であるから、話は多岐にわたる。次いで（2）と（3）に言及する。政治に関連した種々の言葉を引用しながら、「あるべき姿としての政治」ならびに「現実としての政治（特に日本）」について述べてみたい。

## 「政治をめぐる言葉」

秋 山 和 宏

政治という言葉はよく考えてみると中身がなかなかわかりにくい。幸い、政治についてはいろいろな言葉で表現されているので、それらを適宜引用しながら、改めて政治とは何かということをお話できればと思っている。

ところで長年政治を勉強していて、いつもどうも損だなと思うことがある。「何を専攻されていますか」と聞かれて、「政治です」と答えると、大抵話はそこで終わってしまって、それ以上はあまり相手の方も聞いてこないのである。これが歴史や考古学や文学や美術などであると、「この点はどうですか」とさらに話が弾むのだろうが、政治というどうしてもそうはいかない。今日もどれぐらい皆様に興味を持っていたかのような話ができるかと心配している。

本日の話の主旨は、政治というのは何なのかということを少しでも御理解いただければということである。よく「現代は政治化の時代」と言われるように、今日では否でも応でも政治が圧倒的スケールであらゆる事がらに関わりを持つ。すなわち政治というものが地球的な規模での広がりを持つ。さらに広がりだけではなくて深さ、深さというのは、つまり政治が我々の心の奥深くまでずかずか入ってくるといことで、実は現代人は非常に広く深く政治と関わらざるを得ないような状況になっている。そうした点を踏まえて政治というものをいま一度我々は考えておく必要があるのだろうと考えた。

それでは政治とは何なのか。我々は普段、政治あるいは政治を含意する政治家、政党、政府といった「政」の字のつく言葉をよく使うが、改めて政治とは何かと問うてみると、実はその答えは必ずしも簡単ではない。その証拠に、政治の定義、政治とは何であるかということの答えは、実は政治学者の数だけあると言われたりするわけである。政治学者の数だけあるということは各々の政治学者が、これが政治であると考えてるのが政治であって、それらを並べてみるとかなりまちまちであることがわかる。

したがってそもそも政治というのは非常につかみにくく、どこからどこまでの何が政治なのかということが、非常にわかりにくい現象なのである。

そのようなやっかいな現象を研究しているのが政治学という学問であるが、これに関してはよく、「政治学というのは人類最古の学問の一つである。」と言われる。いろいろな学問があるけれども、それらの中で最も古い学問の一つが政治学である。長い歴史と伝統を持った学問であると言うのである。この点に関しては非常に誇りに思うわけである。だが言葉はそれに終わらず、「しかし現代においては最もおくれた学問の一つである。」と続く。そうしたくだりになって途端に落胆するのである。古いけれども非常におくれた学問であると見られている。古代ギリシャ以来幾多の政治家、思想家、あるいは学者が政治について、あるいは政治のあり方について、いろいろと研究し主張してきた。そのような歴史を持ちながら、しかし現在においては非常におくれた学問の一つになってきていると言われるのはなぜなのか。それは我々が研究相手にする政治現象が、先ほど言ったように、とりとめのない現象であることに帰因する。そのためにいろいろ悪戦苦闘して、政治現象の正体を突き止めようと努力してもなかなか埒があかない。かつて17世紀に英国の政治思想家トマス・ホブズが『リヴァイアサン』という本を書いた。リヴァイサンというのは巨大な怪獣で、彼は国家を怪獣に例えた。このとてつもない化け物は我々のような非力な人間を寄せつけず、その正体をなかなかつかませない。あちこちから眺め研究しようとしても容易なことでは正体をつかめない。このように研究対象が一種の化け物みたいなものだということに政治学が遅れをとっている一つの原因があるのかと思っている。

さらにもう一つわかりにくくしているのは、政治現象の中には本質的に正反対の性格が内包されていることである。フランスの政治学者、憲法学者であるモーリス・デュヴェルジェは政治をやヌスという双面神に例えた。政治というのはまさに胴体は一つだが二つの顔を持つ、すなわち全く正反対の性格をその中に含み込んでいると言うのだ。したがって一方の顔を見れば政治というのはこの上なくすばらしいものに見える。政治こそ人間の行為の中で最高の行為であると古代ギリシャ時代にはそう考えられていたようである。しかしもう一方で日ごろの政治の腐敗し墮落した面を見るにつけ、これぐらい醜悪で、人間のいやらしい面がいろいろな形で露

呈される現象はないとも思われる。神々しい人類の栄光を築き上げるのも政治であるし、醜さ非情さを露呈するのも政治である。それらのうちのどちらかが政治ではなく、両方ともが政治であるというところにわかりにくく捉えにくいものになっている原因があると考えられる。

そうしたことを承知の上で、あえて政治というものについて、もう少し私なりにお話ができればと思う。ここでは政治というのは我々人間が宿命的に社会というものをつくって生きていかざるを得ない動物であるという事実、アリストテレスの言葉で有名な「人間は社会的動物である」、社会をつくって生きていく、そういう動物であるという点に手がかりを求める。社会なるものはだまって自然に維持され、動いていくわけではないだろう。むしろ維持しようとする、あるいはこういう社会にしようという意図や努力があって初めてこれが社会として成り立っていく。そうしたことをなす働きを政治というふうに考えよう。ただし、これではまだ政治とは言えず、政治の政治たるゆえんは、権力の存在である。権力という強制と制裁を本質とする力を使って社会をまとめていく、維持していく、あるいは方向づけをしていく、そういう働きをここでは政治と考えた上で、さらに話を展開させていきたい。

権力によって形成・維持・方向づけされる社会は人間によって構成される。この人間というのはよく考えてみると非常に複雑な性格を有している。よく引用される言葉を借りると、「人間は神ではないし、かといって単なる野獣でもなく、神と野獣の中間に位置している存在」つまり神のように徹底的に理性で生きていけるわけではない。しかし野獣のように本能だけで生きていくわけでもない。ほどほどに理性を持ち、ほどほどに本能を発揮する。ほどほどというのは、ある意味、別の言い方をすれば非常に中途半端に理性を与えられ、中途半端に本能を与えられているということで、こうした宿命的限界が社会の中に紛争を不断に引き起こす原因となっている。このように人間社会における紛争の原因をたぐっていくと人間性そのもの、今言ったような特徴を持つ人間性の中に紛争を生み出す根源がありはしないか。もし人間が神であれば争いは起こらないかもしれないし、野獣であれば本能のおもむくところとなり、むき出しの力がぶつかり合う状況となる。ところが人間の場合には幸か不幸か、知恵というものを与えられているため、相手をだましたり、相手をおだててみたり、あるいは見栄を張ってみせるとか、そういう込み入ったことをし

ながら、社会の中で生活を営んでいる。こうしたことが人間がつくり出す社会を非常に複雑なものにし、際限なく対立を生じさせる。また神ならぬ身として、常に偏見がついて回る。さらに多少の予測能力を持ち、科学を発達させたりして来たが、遠い先まで完全に予測する力というのはまだない。全くないわけではないけれども、ほとんどない。そういう不完全な予測能力というものからお互い同士に誤解や偏見が生じ、ひいては争いを生み出す。そのような困難な性格を人間が持っていることが不断の争いを生んでいく一つの原因になっている。

それからもう一つは、単なる物質だけではなく精神を含めた、いろいろな「モノ」というものが社会の中に存在し、これらのうちで限りのあるものが価値とされていること。モノを求める者が多ければ多いほど、他方、手に入れる者が少なければ少ないほど、それはより大きな価値になる。また価値というものは現実の社会の中に均等に配分されるわけではないから、必然的に偏在する。したがってだれがどれだけの価値を手にするかということが非常に大きな問題になるわけで、それが争いを生む一つの大きな原因になる。よく現実の社会はゼロサム社会（人々の利益をプラス、マイナスを全部足し合わせるとゼロになる社会）と表現される。したがってゼロサム社会においてはだれかがプラスの利益を得れば必ずどこかにマイナスの不利をこうむる者がいることになり、皆が利益を手にするというわけにはいかない。幸せになる者がいる反面、どこかに不幸せになる者がいるのが現状における人間社会の実態である。そのような人間社会の持っている現実が、やはり争いを生み出す一つの要因になると考えられる。争いを放置しておけば社会は成り立っていかなくなるので、権力で諸々の紛争を解決しながら社会を社会として維持し、よりよい社会に方向づけをしていく働きがどうしても必要になる。仮に人間が現状を脱して神のようになれば、恐らくこうした努力、すなわち政治は我々の社会にとって必要がなくなるであろう。したがって政治を特色づけている権力なるものも、この世から消滅してしまうことになるであろう。

これまで述べたように、政治は権力を使いながら、社会内の紛争を解決・調整することで社会を維持していく、方向づけをしていく働きである。そこで次に問題とすべきは権力なる代物である。これをめぐってはさまざまなことが、多様に表現されているが、ここでは権力を一種の魔力、悪魔の力に見立て、人間は悪魔の力を借

りながら、みずからの社会をつくり、政治という仕事をしていると考えていく。したがって政治家というのは悪魔と向き合って、悪魔の力を利用しながら、社会を維持していくという面倒な仕事をしている人たちということになる。ここに一つ人間の持っている難しさというのがある。

近代以降、権力は悪であるという考え方が一般的といってよい。しかし必要ではある。このように権力というものを必要悪としてとらえてきた。悪だから不必要である、いらぬというのではなくて、悪ではあるけれども必要とせざるを得ないと考えて、その権力を使いながら、社会の維持・方向づけ、すなわち政治を行ってきた。権力に対してはこのような認識を持って臨んでいかなければならないと思う。もちろん政治思想の中には権力というものをすばらしいものとして、人類の栄光を達成する力として賛美する権力観を有するものもないわけではないが、ここではそういう意味で、むしろ権力というのは悪魔の力であって、だからどうやって悪魔とつき合いながら悪魔の力を利用していかということが非常に重要なのだとおきたい。本当ならばこんな悪魔の力を借りずに人間の社会が維持していければ、それにこしたことはないであろう。ただ、この力は一種の劇薬のようなもので、社会を維持していく上では非常に効果抜群である一方、使い道を間違えれば命を落とす危険性を伴う代物である。また悪魔は常に人間を墮落させようとしていろいろと誘惑をしかけてくる。甘いささやきに負けて墮落する政治家も枚挙にいとまがない。そうした非常に危ういところで我々は自分たちの社会を維持している、つまり政治というものを行っている。したがって、悪魔の力を使いながら政治をやる政治家というのは、最近では組織や知名度を有する者が気安く政治家になろうとするが、そういうことを考えるならば、やはり政治家という職業にはそれにふさわしい条件が必要なのではないだろうか。このことをはっきり示したのがドイツの学者マックス・ウェーバーで、1919年に大学生に対して行った講演をまとめた『職業としての政治』という本の中で政治家の条件を説いている。要約すると、何よりも必要なのはまず情熱。世のため人のため、社会をつくる。そういう仕事に対して強い情熱を持っていること。同時に時代や社会の現況をきちんと認識をして、将来のビジョンを構想する能力を有すること。「情熱」と「構想力」、さらにもう一つ、「責任感」ということを提唱している。ウェーバーが言っている責任というのはどちらか

という過程を重視する我々の日常生活における責任とは違って、政治の責任というのはすべからず結果責任であるとして、結果に対していさぎよく責任をとれるということが政治家にとって必要な条件を説いている。これらを一人の人間に要求するというのは非常に厳しく難しいことである。なぜならば情熱というのは熱く燃える心のありようである。それに対してビジョンを持つ、社会の将来を構想する、これには冷めた頭、頭脳というものが必要とされる。しかし並の人間にはこれらを同時に満たすことは至難の業である。心が熱くなると、どうしても頭のほうが、恋愛を考えればそうであるように、周囲が見えなくなる。逆に頭が勝ちすぎるとなかなか情熱が湧いてこない。官僚に典型的とされるように、頭は非常にクールけれども、心がホットにならない。政治家はその両方を持ってほしいのだと言っている。とはいえこれらを両立させることは難しい。そのことを知りながらあえて政治家の条件の中に、情熱と構想力を挙げているのはなぜかということ、それは政治という仕事は社会の全成員に影響を及ぼす非常に大切な仕事であるということと同時に、政治というのは先ほども言った、悪魔と向き合いながら、それに誘惑されずにその力を効果的に利用することで社会をつくっていくという仕事であることに帰因する。したがって、誰でもが政治家になっていいというわけにはいかないわけで、やはりそれなりの条件を備えた人物が政治家を目ざすべきであろう。大学生に対して将来、政治を志す場合にはぜひ特別な気持ちを持って臨んで欲しいとして、以上のような非常に厳しい条件を政治家の条件として課したのである。重ねて言えば、政治という職業の持っている特有の難しさや複雑さ、それらにきちんと対処できる人間がふさわしいとしたのである。

歴史的に見ると、特に近代以降、自由主義においてこのように権力を必要悪と規定しながら、つまり悪魔とつき合うことを前提にして、しかし何とか悪魔の力の弊害が及ばないようにいろいろ理念や制度を模索してきた。それが例えば政治は法というルールに従ってきっちり行わなければならないとする法の支配という考え方であり、その国の政治のあり方の基本を示している憲法その他の法律をきちんと守る形で政治は行わなければならないという立憲主義の思想である。さらには権力分立の制度。すなわち権力を分散・相互抑制させることで悪魔の力が及ぼす悪影響を少なくしていこうというしくみである。あるいは現代では政治の重要な争点の一つと

なっている小さな政府の実現等々である。

近代以降に構想されてきた考え方の根底にあるのは、人間がこの世で人間らしく生きていくことが大切で、そのために自由と平等が必要ということであった。自由と平等が人間らしく一生を送っていくための不可欠の価値であることを人類が強く意識し始めたのは、中世のころと言われている。例えば中世のイタリアにおけるルネッサンス運動はそのさきがけをなすものであった。そこでは古代ギリシャの実にのびのびとして人間らしさにあふれた文芸が憧れをもって迎え入れられ、古代ギリシャの雰囲気の中世のイタリアの文芸に復興させようという動きとなった。つまりルネッサンス運動を通して人間らしさを生み出すのは自由であるということが認識され始めたのである。一方平等についての認識は、その後少しおくれて起こったドイツの宗教改革が起源とされる。すなわちこの運動の担い手であるマルチン・ルターの思想の中に、簡単に言えば、神の前においてすべての人は平等であるという考え方が色濃く見られたからである。以来、宗教改革の広がりと共に平等が人間にとって非常に重要な価値であるとの認識も浸透していった。自由と平等は欧米においてはその後各々別の歴史をたどっていくことになったが、19世紀になって、ようやく自由民主主義として自由と平等とが結合され今日に至っている。

もちろん現在が完璧というわけではないから、そういう自由と平等というものを求める歴史は、これからも続いていくであろう。上に述べたように長い年月をかけてそのような社会を求めて努力をしてきたのが人類の政治の歴史である。その歩みは非常にのろい。何かをしたらずぐ変わるということではなしに、間愈っこいが我々の社会は何十年、何百年といった単位の中で徐々に変わっていくのだというくらしいの気持ちを持つことも必要であろう。

次に、あとで民主主義という言葉を取上げるが、話の流れとしてここで一言触れておきたい。本当の意味で民主主義という言葉が、プラスのシンボルとして世界中に浸透したのは20世紀である。それまでは民主主義はむしろ危険思想と見られてきた。例えば17世紀のイギリスでピューリタン革命。あの革命の主体となったのはピューリタンであったが、彼らは決して一枚岩ではなく、いろいろな考え方のグループがあった。非常に保守的なグループもあれば、中道的なグループもあった。そして中には超過激なグループもあった。そうしたピューリタンの中の最も過激



な、最左翼に位置していたグループの中に、レベラースという団体があった。このレベラースというのはレベル、すなわち皆同じ水準にしようということ、日本流に言えば水平派と呼ばれるような、平等を主張するグループであった。彼らは平等な政治参加を唱導したことから近代、現代的民主主義の始まりとされている。さらにはフランス革命のプロセスに出現したロベスピエールの恐怖独裁政治がイコール民主政治とされたりして、民主政治というのはヨーロッパにおいては危険思想と考えられてきた。民主主義や民主政治がプラスのシンボルとして社会に定着するためには20世紀を待たねばならなかった。

話を権力に戻そう。権力の特色を語る場合、ホッブズの非常に適確な指摘を取り上げざるをえない。すなわち彼は権力の追求は、「死ぬまで止むことがない」とした。卓見である。人はなぜ権力を求めるのか、権力を持つ者はなぜさらに権力を求め続けようとするのか。普通に考えれば、もっと強大な権力を求める権力欲からだと答えると思う。そのような面もあるだろうが、ホッブズは、権力を失うことへの恐怖心が人をして権力を求め続けさせると見た。これはちょうど自転車はペダルを絶えずこいでいないと倒れる、倒れると困るからこぎ続けるということに似ている。同様のことは日本の大野伴睦という昭和30年代に自民党の副総裁として権勢をふるった政治家が言ったとされる有名な言葉、「猿は木から落ちても猿だが、国会議員は一度落ちればただの人。」にも示されている。木に登っていた猿が誤って地面に滑り落ちて、猿は猿である。けれども国会議員は一度落ちれば普通の人間になってしまう。国会議員が落ちるのは選挙、一たん選挙に落ちると特権を与えられた国会議員ではなくて、一般人になってしまうといった趣旨である。なぜ、政治家は国会議員であり続けたいのか。それはただの人になるのが怖いからである。国会議員でいる限り権力者であるから人が大勢寄ってくるし、周りもいろいろちやほやしてくれたりするであろう。しかし一旦国会議員の肩書きが外れ、権力を失ってただの人となると、もう誰もふり向きもしなくなる。そうなるのが怖いという心理、それが政治家をして常に次の選挙を求めさせることになる。大野伴睦とホッブズは全然関係ないわけだが、片や政治思想家として、片や現実政治家として権力について同様の真理を見抜いていたと言える。

権力を考える手がかりとしてももう一つ言葉を引用しよう。19世紀のブランキとい

う思想家は権力を過激な形で表現している。「特権階級は、貧乏人の汗によって飽食暖衣している。議会は2500万人の百姓と、500万人の労働者とを搾取して、その血を富める者に輸血する機械にすぎない。税金は有閑階級による労働者の強奪である。」と。政治や国家や権力を、このような価値観でとらえている。先ほど言ったように、権力というものを非常にすばらしいものとして賛美する考え方が一方ではある反面、政治支配の手段、特権階級の道具と見る権力観もあるのである。

さらに、権力に関して、もう一つ有名な言葉を紹介しておきたい。ルソーという18世紀のフランスの思想家が、我々日本人にもちょっと耳が痛い、次のようなことを言っている。「イギリスの人民は自由だ、自分たちは自由だというふうに思っているけれども、それは大間違いである。」と。彼はフランス人なのでイギリス人に対してはきわめて辛らつで、続けて「彼らが自由なのは、議員を選挙する間だけのことで選挙の期間中だけのことであって、選挙が終わってしまえばたちまち奴隷の身となり、なきに等しい存在となるのである。イギリス人が自由を許されたこの短い期間中でも、その自由を行使するしかたを見ると、これでは自由を失うのもっともだと思われる。」と。選挙のときは権力者である議員も有権者に平身低頭して願いをする。しかしこれは議員を選挙する間だけのことで、選挙が終わり、議員が選ばれるや否やイギリス人民は奴隷となると、自由がなくなる。無に帰してしまうというふうな言い方をしている。あるいは「権力は腐敗する。絶対的な権力は絶対に腐敗する。」という有名な言葉もある。権力が強くなればなるほど、これはもう間違いなく腐敗すると。こんなことをイギリスのアクトン卿が言っている。

さら権力とは相手をこちら側の意図に従わせる力であるから、その行使と服従にはいくつかの形態が見られる。なかでも「強制」は権力の核心であり、究極の手段とされる。しかし軍勢力や警察力といった物理的強制力を使って反対者を抑圧し、無理やり相手を従わせるのは、一見強そうだが、必ずしも効果的ではない。なぜなら相手は恐怖心から、表面上、一時的に従う態度を示すだけで、心から服従するわけではないからである。最も強い服従の形態というのは相手が心からこちらを信頼して、そして自発的、積極的に服従をしてくる。このような関係を構築することが社会形成を任務とする政治にとって、強力かつ安定的にそれをなすいう意味で、最も重要なあり方である。それでは自発的服従をもたらすものは何か。これを

ウェーバーは正当性という言葉で示した。そのような正当性に裏づけられた自発的服従をもたらす力は権威という言葉で表現される。したがって、相手の自発的服従を引き出す「権威と信(心)従」の関係を形成し、維持していくことが権力行使の面からする政治にとっての最重要課題であるということになる。

通常、われわれは政治や権力のあり方、態様を表現する際に、「飴と鞭」という言葉をよく使う。古今東西どの支配者、権力者も「飴と鞭」（強制の手段と相手の欲する価値）を駆使しながら人々を服従させようとしてきた。しかし、飴も鞭もこれは相手が心から服従するものにはならない。鞭でひっぱたくぞと威して言うことを聞かせようとする、相手はひっぱたかれるのが怖いから従うであろう。また飴を与えて従わせようとする、相手は欲得から従おうとするであろう。確かに飴や鞭で相手は表面的、一時的には服従するだろうが、しかし、心から服従するわけではない。「剣で何でもできるが、その上に腰掛けることはできない。」というフランスの政治家タレーランが言った言葉にも簡潔に示されている。剣を振り回せば相手を服従させることができるが、その上に腰掛けることはできない。もちろん剣の上に腰掛けることは実際にできないし、剣を持っているから安心かというそうではなく、いつ相手が反抗してくるかわからないので気が安まらない。だから剣を振り回してやるような政治は得策ではないとの戒めである。このように飴や鞭や剣は政治を特徴づける権力手段であるが、効果は限定的である。したがって本当に必要なものは「Bullet よりも Ballot」であるという言葉もある。「Bullet」とはピストルなどの弾、実弾のことを言い、「Ballot」とは、投票用紙のことを言う。これらは何を意味しているかという、と、「Bullet」は軍隊、警察、先ほどの鞭と一緒に、相手を脅かして、こちらの言うことを聞かせる手段である。これに対し「Ballot」すなわち投票用紙は権威をつくり出す手段である。投票用紙は選挙を連想させる、選挙というのは政治を委せる代表を選ぶ手段であるから、民主主義の考え方に即しているとされる。それゆえ選挙という方法が社会的に承認されているわけで、皆が承認するようなやり方でやることで、権力の正当性が、社会の中にもたらされ、権威と信従という望ましい権力関係が確立される。以上から政治にとって必要なのは剣を振り回したり、ピストルを突きつけて相手を強制することではなしに、権威の関係、すなわち正当性を社会の中に調達し相手との間に信頼関係を構築することであるとの

結論が得られる。

ここでもう一つ勝手な解釈をしてみたい、政治は、日本語で今は「せいじ」と言うが、古くは「まつりごと」と言われ、「政」あるいは「政事」という漢字が当てられた。お祭りをするのが何で政治なのかと奇異に感じるかもしれないが、政治を「まつりごと」と呼んだことには、実は非常に深い政治学的な意味合いを見て取れる。なぜかと言うと、お祭りをする、神を祭るという特別の職務を遂行することで、他と違う超能力（カリスマ）の持主であることを示し、人々を圧倒する機会であるからである。実は先ほど触れなかったが、世の中に正当性をつくり出す根拠になるものは何だろうということをマックス・ウェーバーは追究していった。換言すれば支配や服従に関し正当性、すなわち倫理的、義務的に正しいという意識を人々に持たせる根拠は何かということである。彼によれば一つは伝統である。昔からずっとこうやっている、そういう伝統というものが人々に正当性の意識を植えつけていくとした。何百年、何千年ずっとこの国はこの家柄が支配してきたという、そのような長い伝統、歴史というものが人々に「正しい」という気持ちを起こさせる根拠になる。次いでカリスマというものを挙げている。カリスマとは超能力を意味する。人並み外れた能力を持っていることが、人々をしてその支配に対して正当性を抱かせる。さらにもう一つが合法性。法律に合っている。支配のための制度や行為が法律に合っているということが、「正しい」という意識を人々に植えつける根拠になる。そこで先ほどの日本の政の説明に戻ると、難解な呪文を唱えて、神様を祭るといった儀式を取り行うことは神とのコミュニケーション能力というカリスマを民衆に誇示することで正当性を調達する権力のメカニズムを含意している。神がかった話だが、祭政一致という言葉もあるようにもともと政治には非常に神がかったところがある。何やら神とコミュニケーションを行い、神のお告げというものを人々に伝える。それができるカリスマを持っている（と信じる）がゆえに、民衆がその人物の支配に対して正当性を持つことになる。古くから支配者、権力者はこういう演出をよくやってきた。現代の支配者、権力者は合法性を強調することで、みずからの正当性を人々の中に植えつけようとする。それが信頼を生み、自発的に服従してくる。そのようにして権威の関係を樹立させようとする。時代によって大分違うわけだが、政治の本質は、まさに人々に正当性の意識を植えつけていくところにある。

政すなわち祭りをすることによって超能力を人々に見せつけ、自発的服従を引き出し、権威を確立していく、それが政治だと言っているわけで、たった一つの文字の中に、今日の主題である政治についての説明のエッセンスが見事に含まれていることに驚かされる。

次に政治家に関する言葉を取上げてみよう。一口に政治家といっても現実の政治の世界を見ると、これには「政治家」と「政治屋」と「政治業者」の3種類があるとされる。政治家というのはウェーバーが示したような条件を備えた人物。政治屋というのは、政治家との対比で次のように言われる。「政治家は社会の将来を考え、政治屋は次の自分の選挙のことを考える」と。要するに、政治家は社会全体の利益（公益）の実現のために努力するのに対し政治屋は自分の利益（私益）の追求に汲々とするとも言えよう。政治業者というのは、政治を一つのもうけ仕事のようにしている人物である。そのことに関しては英語でも似たような使い分けがされている。本本の意味の見識の高い政治家を statesman と言うのに対して、いわゆる政治屋は politician という別の言葉で表現される。いずれの社会も同じだということなのだろう。

さらに、政府に関して触れておこう。近代以降自由社会を求めていくということになると、結局のところ、政府はあまり民間のことに干渉すべきでないとか、できるだけ政府は小さければ小さいほど良いということになり、「最小の政府が最良の政府」という言葉はしばしば引き合いに出されてくることになる。同様に「安価な政府」、「安上がりの政府」、「金がかからない政府」がよしとされ、今日ではこれらの言葉が頻繁に登場するに至っている。政府に金がかかるのは、何でも政府の仕事にするからで、そうなれば当然、税金の形で国民から多額の金を徴収する必要に迫られる。政府から税金をたくさん徴収されればされるほど、各自の手元に残る金、自由に使える金が少なくなり自由度が減る。したがってできるだけ政府は税金を取らない、それには最小限の仕事しかしない小さな政府にするということは政治的・経済的自由の度合いを拡大しようという基本的な考え方に裏打ちをされている。このような財政の面で見れば金のかからない政府、組織でいえば小規模政府、仕事でいえば何もしない政府が良い政府であるという考え、それらを総称して小さな政府論と言う。もちろん何もしないというわけにはいかないから、要するに政府という

のは必要最小限度のことをすれば良いとされる。それでは自由な社会、自由度の最も大きな社会にするとして最小限のなすべき仕事は何か。それは人々が枕を高くして眠ってられる、安心・安全な社会をつくることである。政府はそのことだけをやれば良いのであって、政府、政治、権力などというのはできるだけ社会の前に顔を出さないように工夫し、そうすることで皆の自由を守っていこうという考えが、自由主義の流れとして今日まで続いて来ている。そのようなあり方に対してラッサールはそれでは国家は夜警にすぎないとして、嘲笑的にこれを「夜警国家」と呼んで批判した。政府は小さい方が良いのか、相対的に大きい方が良いのかという命題は歴史的に幾度か展開を重ねながら今日においてなお、政治運営をめぐる中心的議論となっている。

これまで「政治とは何か」ということで、権力にからめて話を進めてきた。すなわち権力を使って社会をまとめていく働きが政治であり、権力を行使しながら社会をまとめていく仕事をするのが政府であり政治家であるという前提で話をしてきた。以上を踏まえてそもそも政治のあり方はどうあるのが望ましいのか。これについては今までの話の中でも若干触れたように、ひとまず自由で平等な社会の実現に努めることと結論づけることができるであろう。ただし、自由と平等というのは、容易に両立する価値ではない。むしろ歴史的に見ると対立をしてきた。自由主義の社会の中では平等は排斥をされた。また先ほど民主主義の思想が近代以降出てきたと述べたが、民主主義はその後平等主義の考え方と親和性を強めていった。そのような民主主義、平等主義の考え方と対立したのが自由主義であった。自由というもののから見ると平等はむしろこれを阻害するものとして位置づけられた。したがって、なかなか自由と平等が一緒に仲良く並び立って両立する社会をつくることは困難であった。そういう経験を我々は近代以降ずっとしてきているのだが、いまだに自由でなおかつ平等な世の中というのは実現されない状況にある。そうした中で19世紀以降自由主義と融合の度を強めた民主主義が、ある事情から、20世紀以降最も重要な価値として世界中に浸透するようになった。この民主主義を非常に端的に表現したのが、アメリカの第16代大統領エイブラハム・リンカーンであった。彼はアメリカで最も尊敬される大統領の一人で、いまだに米国民の間に人気が高い。その理由は南北戦争という内乱の時代の大統領として、国家分裂の危機を救った偉業に

ある。そのリンカーンが南北戦争激戦の地ゲティスバーグに設置された国立墓地の献納式典で行った演説は、今に残る歴史的な演説となっている。その件が「人民の、人民による、人民のための政治」であり、これが民主政治を非常に簡単明瞭に表現した言葉とされる。政治は人民に源を発し、人民によって行われ、人民に利益をもたらす、政治というものはこうあるべきであって、それが民主主義の政治だとの強い信念が込められた演説であった。ただし、一方において、英国の大政治家の一人とされているウィンストン・チャーチル首相は次のように言っている。「民主主義はこれまで試みられた他のすべての統治形態を除けば最悪の統治形態である。」と。逆接的な表現ながら人類が今日まで行ってきたどんな政治のやり方はましであると民主主義に一定の評価を与えつつも決して頭からこれを最高の価値とは考えていない。ともすると民主主義を最善とする風潮の中できわめて有意義な指摘と言えよう。確かに民主主義を最高・最善とする考えには批判の余地があるからである。

もう一つにつけ加えておきたいのは、以上のような民主主義をより充実させるために地方自治というものが必要であるということである。それを強く訴えたのがジェームス・ブライスという学者で、「地方自治は民主主義の源泉であるだけではなくて、民主主義を実践する学校である。」と述べている。地域社会の運営を住民自身が行うとする地方自治は民主主義の原点であるだけでなく実践・教育の場であると指摘したのである。

最後に日本の政治についてもいろいろ興味のある言葉で語られているので、若干ここにも挙げておきたい。とりわけ有名なのが、すでに引用した「猿は木から落ちても」であり双璧をなすのが川島正二郎という、これも自民党の大物政治家の言ったとされる、「政界は、一寸先は闇」という言葉であろう。政治の世界は何が起るかわからない世界だとは、まさにその通りで、今日こうであっても、明日どうなっているかわからない、状況変化の激しい、先行き不透明な世界である。傍らから見てもそう思うが、ベテラン政治家の長年の経験から発せられた言葉だけに妙に説得力がある。これはもちろん日本だけにとどまらず、どこの国の政治においても妥当する普遍性をもった言葉と言えるであろう。

予定では政治文化という観点から、いろいろ表現されている言葉を使いながら政治について話をしようと思ったが、時間がなくなったので、日本の政治を政治文化

の観点から説明した若干の例を簡単に紹介して終わりにしたい。まずは「恥の文化」。これを言ったのはルース・ベネディクトで、彼女は日本の文化を恥の文化とした。ベネディクトによれば恥というのは自分以外の基準に合致しない思考や行動をした場合に感じるものである。日本人は恥をかくことを極力回避しようとするところから集団主義が特徴となる。政治の派閥などはその例である。政治学者の篠原一氏は日本の政治を「なる」の論理という言葉で特徴づけようとした。なるというのは「どうにかなる」ということで「果報は寝て待て」「待てば海路の日和あり」などの諺の中にもそれが示されている。そこに見られるのは状況をじっと見守っていれば必ず良い結果になるという楽観的、成り行きまかせ、状況依存的などの日本の特徴である。これに対し欧米の場合には「する」の論理であって、状況に積極的に関わり、自分たちで状況を打開していこうとする特徴が指摘される。危機に対する彼我の政府の対応のしかたにはっきり見て取れる。いろいろ言葉を使いながら政治が説明していく政治文化論というのが実は政治学の中にも一つ分野としてあるのだが、残念ながらこれ以上話をする時間がないので、きょうの話はここまでに止めたい。